

伝統に創意を加えつつ ―戦後陶芸としての京焼

Originality added to tradition - Kyoyaki as ceramic art after the war

戦後の京焼は新たな段階を迎える。江戸から明治・大正へと連綿と続いてきた伝統のある陶家では代替わりが進み、時代の変化に呼応して新しい感覚を持った世代が台頭してきた。現在では当たり前のように使われている「陶芸」という言葉が一般化するのも、じつは戦後のことなのである。

戦前の官展を引き継いだ日展では美術工芸部門が存続し、京焼でも日展を舞台に活躍する作家がいた。一方、昭和29年(1954)に創設された日本伝統工芸展は、わが国のすぐれた工芸技術の伝承という観点から戦後工芸の復興を支えた。伝統の工芸技術を活

かしつつ、時代の感性に合った作品を作りだしていくという同展の趣旨は、従来の京焼のあり方とも通じるものであった。

また、同時代の西洋美術の影響も相変わらず大きく、彫塑的な量感のある立体作品や、機能を度外視した作品が作られるようになり、京焼の可能性をさらに広げていった。堅牢な伝統を基底としつつも、常に新しい試みへ挑戦することが戦後京焼の一つの方向性となったのである。ここで紹介するのは、戦後の京焼界を担った楠部彌弌、六代清水六兵衛を中心に、独自の作風を開拓した陶芸家の作品である。



36 | 河井寛次郎
《真洲辰砂花扁壺》
昭和三十一年(一九五七)

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

京焼多彩なり ― 明治から昭和へ

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 44

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成十九年七月七日発行

© 2007, The Museum of the Imperial Collections